

# 夢洲の未来

(公社)大阪自然環境  
保全協会 会長  
名古屋大学 名誉教授

なつはら よしひろ  
**夏原 由博**



2025年に大阪市の夢洲で万国博覽会が開催される。1970年の万博は、「人類の進歩と調和」がテーマであった。中学生だった私は、長い行列に加わって月の石を見て、科学技術のすばらしさに感動した。一方、岡本太郎は太陽の塔内部に製作した「いのちの樹」でいのちの躍動と尊厳を訴えた。その思想は万博終了後に受け継がれる。会場跡地は「緑に包まれた文化公園」とする基本計画が策定され、60万本の樹木が植栽された。植樹約40後には「オオタカ」が営巣するなど自然が着実に回復している。2000年からは生物多様性を高めるために、密生しすぎた木を切って空き地をつくる「人工ギャップ」という管理手法を採用し、モニタリングを継続している。

2005年の愛・地球博では、会場予定地にオオタカの営巣が確認された。貴重な自然を守るために会場計画が大幅に修正される。里山が守られたのみならず、造成による土地改変をおこなわずに地形

の起伏やため池を残した会場となつた。会期中は再生可能エネルギーの利用や壁面緑化「バイオラング」の利用など、自然環境保全のための知恵が活用された。これらを取り組みは、2010年の生物多样性条約COP10や2014年のESDユネスコ会議の愛知開催につながつた。

2025年万博はこれまでの博覧会と異なり、海上埋立地を会場とする。しかし、ここが自然の宝庫であることは知られていない。過渡的にできた湿地に本州最多、数百羽のツクシガモを含む数千羽以上の水鳥やワシ・タカ類が飛来し、絶滅危惧種コアジサシが繁殖する。大阪では絶滅した水草、カワツルモの生育も確認された。夢洲がある大阪湾奥はもともと難波潟という干潟が広がり、豊かな漁場が形成されていた。陸と海のつながりが豊かな自然を実現する。埋め立てによつて干潟は失われたが、水鳥たちの渡りのルートは変わらず、人工的な干潟が出現すると再び訪れたのだ。人間が奪つてしまつた、住かの一部を返せないだろうか。

大阪は人と海が創りあげてきた。藻塩が焼かれ、海産物が採られ、商船が行きかつた。コンクリートで覆われた大阪は一時的な姿に過ぎない。コロナ後の社会の在り方として、環境を重視した経済政策であるグリーンリカバリーガが必要とさ

れる。夢洲が最新の技術を用いるスマートシティとなることは素晴らしいが、海の豊かさを置き去りにしてはならない。どうすれば子供たちに海の豊かさを伝えられるのか。阪南市では小学生がアマモ場の再生に取り組んでいる。海の森(アマモや海藻)は魚のゆりかごとなり、地球温暖化対策に役立つ。東京湾ではコンブが養殖されている。関西空港の傾斜護岸には豊かな藻場が形成され、カサゴやメバルが住みついだ。野鳥園臨港緑地(南港野鳥園)の森にはアカテガニが住み、泉南の海岸ではウミホタルが光る。夢洲で実装される「いのち輝く未来社会」は地球が人のためにだけあるのではなく、多くのいのちを育んでいるという気づきをもたらす社会としたい。

## (略歴)

1956年滋賀県生まれ。

京都大学大学院農学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(農学)。

大阪市立環境科学研究所研究員、大阪府立大学助教授、京都大学特任教授を経て、2010年から21年まで名古屋大学大学院環境学研究科教授。専門は保全生態学。

主要著書:『地球環境と保全生物学』(岩波書店)、『にぎやかな田んぼ』(京都通信社)、『いのちの森 生物親和都市の理論と実際』(京都大学出版会)